

廃バッテリー

海外争奪戦、価格高止まり

韓国、中東で買い負け

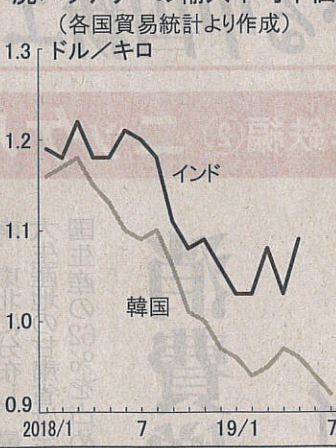
韓国の廃バッテリー（使用済み自動車用鉛蓄電池）集荷が後退する地域が出てきた。アフリカや中東において、輸入を拡大しているインドとの競合が激化。価格面において買い負ける輸入相手が出ており、韓国が後退を余儀なくされているもようだ。こうした集荷競争に収まる気配がないことが、世界的な廃バッテリー価格の高止まり要因となっている。

世界最大の精製鉛輸出国となった韓国は、世界各国から鉛リサイクル原料の廃バッテリーを輸入している。その大手輸入先の一つだった日本からは、環境管理上の問題により昨年後半からストップしているものの、北米か

らの調達を増やすなどしてカバーしている。韓国の貿易統計によると、直近7月の廃バッテリー輸入量は4万1316ト。輸入先は米国が1万8177ト（44%）、UAE（アラブ首長国連邦）4608ト（11.2%）、ニュ

ージーランド2232ト（5.4%）、カナダ2068ト（5%）と続き、上位4カ国は前月と同じ顔ぶれだった。地域別の比率を見ると、北米49%、中東14.3%、中米10.1%、アフリカ9.9%、オセアニア9.2%、アジア7%。18年の比率は北米31.5%、アジア21.9%、中東19.7%、中米12.1%、アフリカ7.7%、オセアニア6.4%。日本を主と

廃バッテリーの輸入平均単価



したアジアの減少と北米の増加は相殺されているが、中東は5.3%増、16-17年は20%以上を占めた対中東だったが、集荷に苦戦している状況が浮か

び上がる。また、対アフリカは7月単月で増えたものの、16年13.1%、17年10.2%、18年7.7%と、近年は輸入比率が低下傾向にある。韓国の主な輸入相手国であるトーゴ、ガーナ、ナイジェリアでは、鉛リサイクルが盛んになっているインドも調達攻勢を強めており、拡大するインドに対して韓国が押されている格好だ。インドの18年輸入量は前年比49%増の12万4263トで、今年も前年同期比3割増のペース。

韓国対インドの廃バッテリー争奪戦の優劣は、両国の輸入平均単価にも表れている。ロンドン金属取引所（LME）の鉛相場下落に伴い、韓国のキロ当たりの輸入単価は7月0.92と、18年初めと比

べると2割前後ダウン。一方のインドは4月まで1.1ドル以上を付けた。韓国と比べて高値買いができる価格競争力の強さを示している。

海外流出に歯止めがかかった日本国内の廃バッテリー単価はキロ30-40円台に冷やされているが、海外では依然として円換算で100円を超える貿易取引が続く。背景には韓国とインドを中心とした集荷競争がある。こうした情勢は、国内で廃バッテリーから再生した中間原料の粗鉛（フリオ）輸出でも、国

際的に価格競争力をもち得ることを意味している。